



窓から学ぶ

学校長 小邑 政明

私は、自分の人生において「窓」についての特別な思い出が二つあります。

一つ目は、事務職として岐阜県庁に勤めていたときのことで。当時、県庁には岐阜県警も入っており、手狭でした。会議は、狭い部屋でたばこの煙が充満する中で行われることもありました。私は、できるだけ「窓」に近い席に座り、喫煙している先輩に嫌味にとられないよう窓を少しだけ開けて新鮮な空気を吸いました。窓を通して入ってくる風に感謝したことを、今でも思い出します。

そういえば、英語の[wind]と>window]の類似が気になり、辞書で両者の関係を調べたところ、『窓(window)=風(wind)+目(ow)→風の入る穴』であることを知りました。

二つ目は、大病を患い一か月ばかり入院していたときのことで。最初の一週間は手術と術後の安静ということもあって寝たきりでしたが、二週目に入り少し元気が出てきて起き上がれるようになると、病室の「窓」から外の景色を眺めることが唯一の楽しみになりました。窓を通して外の躍動感に触れ、元気が出たものです。

「窓」には、「風を入れることができる」と「外を見ることができると」という二つの大きな役割があることを学びました。

本校の教室は廊下との間がガラス張りになっていて、廊下を歩いて行くだけで、各クラスの生徒の皆さんが授業を受けている様子や先生方の板書なども、一目瞭然です。また、総合学習センター(従来の職員室のことですが、本校では生徒と先生が共に学ぶ場所であるという意味をこめてこのよう

に呼んでいます)もガラス張りになっており、生徒の皆さんが気楽に質問にいくことができる環境を作っています。生徒と先生のコミュニケーションを大切にするとという経営者の思いが伝わってくる施設づくりが行われています。

また、外部の講師による研修会を実施したり先生方の研究会への参加を奨励したりして、「外の風」も積極的に取り入れていきたいと考えています。

こうした考えは、「窓」から学んだ二つのことと一致するところがあります。

さて、本年度の大学入試二次試験問題(数学)の分析も終わり「生徒の素朴な疑問に答えるために」にまとめました。その過程で、2020入試を意識してか各大学の問題の奥行きが深くなっていることを痛感しました。私は、大学入試問題にも「窓」があると考えています。窓を開き問題の背景を眺め、流れ来る作問の意図という風に触れて、的確に解答を返すことが求められています。そして、窓を開くカギは「常に自分の頭で考え、論理的洞察力を磨くこと」であると私は考えます。

大学受験で厳しい状況下であっても、生徒の皆さんや先生方が気楽に校長室に入ってきていただけることを願い、校長室のドアを開けています。保護者の皆様にも気楽にお越しいただければと思っています。お子様の「夢の実現」のため共に頑張りましょう。夢は「実現」すると「現実」となります。夢が現実になったとき、喜びを分かち合いましょう。

今回は「父母から学ぶ」について書きます。